

専念寺通信

専念寺通信

十一月号 (NO. 99)

<http://sennenji.s296.xrea.com/>

暖かで穏やかな秋が続いています。世界ではアメリカ合衆国に始まった経済危機が、またたくまに広がり、私たちの国でも、大きな規模の会社から小さな個人経営の店にまでその影響が出てきました。何やら安心のできない世界経済の動きです。

☆安心して生きる

今月号では、私たちが「安心して」生きていくことについて、少しだけ考えてみたいと思います。最近、中国産の食品から農薬が大量に検出されたり、そのほかの食材からも身体に害のある薬物がみつかったりしています。このような報道にふれるたびに、私たちの食べるものの多くが輸入に頼っていることがはっきりしてきました。農産物だけでなく、水産物もとても遠い海域から運ばれていることがニュースなどで知らされると、何となく違和感を覚えます。私たちの国は50年、60年前からずっとそうだったのか、と。

戦争の終わったのが63年前です。その後、当時20代30代の人たちは文字通り必死で生き延びようとしていました。焼かれてあとかたも無くなった家を作り直し、荒れた田畑を作り直し、疎開したまま故郷に戻れない人はその地で、新たに一から始めたのです。そして、その人たちが次世代にバトンタッチした頃から、私たちの国は少しずつ変化を始めます。経済は成長しました。しかし同時に、もしかしたら私たちは「手離してはならない」ものを手離してしまったのではないのでしょうか。

先進国と呼ばれる国の食料自給率を考えると、それがよく分かりま

す。自国民を自国でとれる食料でまかなえるかどうかという計算です。日本でも農林水産省が発表しています。トップはオーストラリアの237パーセント、アメリカは128パーセントです。私共の滞在していた国フランスも豊かな酪農国ですが、自給率122パーセントです。これは、たとえば国民全部に食べさせて、まだ2割くらい余るという数字です。さて、私たちの国の自給率は40パーセントと、先進国の中でもとても低い数値です。自国で取れたものだけでは6割の人は飢えてしまう、ということになります。

国土の半分が砂漠、という国があります。一年が雨期と乾期だけに分かれているという厳しい気候条件の国があります。私たちの国はどうでしょう。かなり恵まれた気候で、さほど広くない国土ですが、土壌は豊かで川が多く、まわりを海に囲まれており、人々は勤勉です。かつての私たちがしたように、土地を耕し、近海で漁業を営み、自分たちの生活を自分たちでまかなうというやり方はもうできないのでしょうか。経済が発展するということは国の人たちがみな、安心して暮らしていけるということとイコールではないのでしょうか。あの国のものをこの国にまわして稼ぐ、というやり方だけがすべてではないはず。「安心して」生きるために武器を買うのは間違いです。「安心して」生きるためにもっと着実に地味な努力が必要です。自分たちの国を守るためにみずから「養う」方法を、できるだけ早く作るのが先決です。架空の出来事と架空のお金でできた世界は本当に私たちに必要でしょうか。

平成20年11月
1日 大黒

